

父母の教育要求についての世代論的分析

都築 亨 倉田 有邦 富田 昇

1 はじめに

昨年度の紀要において、われわれは中等教育に関する父兄の社会意識が最近大きく変わっているのではないかということで、特に生活指導面を中心に教育的要求や教育への期待が、一昔前と比べてどのような点で変容をとげているか、制服問題とか、長髪についての意識を世代別にアンケート調査を試み、更には高校への進学率が急激に上昇し、ほとんど92%が何らかの形で高校に進学している現在、高校教育の今後の在り方についての手がかりを得ようと考えた。

その結果については、期待していたような世代による顕著な意識の差をみとめることができず、むしろ制服については若い世代の親に制服指向がうかがわれるなどの仮説とはかなりくいちがった反応を認めざるを得ないような面もあったといえる。しかしながら、教育が大きく転換期にさしかかっている現在、教育の態様を大きく規定する因子の中に父母の教育に対する期待と要求があることはたしかであろうし、その要求や判断の中には、一昔前とくらべてやはり変りかけている点の多々あることを、現場の教師として、生徒に接しながら、又PTA等の会合や面接、生徒の服装や持ち物、遅刻、外出時の配慮等々日常的対応の中から意識しなければならないのである。

果してどこが変わってきたのだろうか。父兄の教育意識の変化を全く無視して十年一日の如き教育をしていたならば、教育は社会から浮き上がってしまうだろうが、逆に又、すべてが変わったとして先走りしていたならば、徒らに無用の混乱を起すだけに終わってしまいそうである。

われわれの最終的な意図は、今後に予想されている学校教育の改造、具体的には、中学校・高等学校の教育課程の改革のプログラムの中に変容をとげてきていくはずの父母の教育要求をどのような形で吸い上げていけるかということにあるが、その以前のステップとして、学校教育と家庭教育との間に焦点をおいて、その関連、それぞれの領域についてのうけとめ方、学校への期待、家庭でのしつけ等について、父兄の意識の世代による違いを分析してみようと考えた。親の年令

層が次第に下降し、昭和10年代の生れの父母、いってみれば戦後派世代の親が、次第に%を増すだろうが、教育が父兄層の側からの要請によって変わるものとするれば、第一に雪崩現象をおこすだろうと思われるのは家庭と学校との領域の索定のしかた、それをめぐる親の意識ではないかと仮説を立てたからである。

したがって今回のアンケート調査の中から、純然たる学校教育の領域・教育課程や教育内容についての父兄の要望めいたものは除外した。

2 昭和世代の教育要求

昨年度の「中等教育についての父兄の社会意識」を調査した場合も、本年度の調査の場合も本附属中学校及び、附属高校の父兄を中心とし、それに名古屋市内昨年場合は他県の高校の父兄若干名について、アンケートを依頼し、その要求と意識を分析しようと試みたものである。その全体について、生年をもとにして区分を試みると次のようになる。(すべて%で示す)

昭和50年度調査 被調査数 (2439)

	大正世代	昭和2～6	昭和6～9	昭和9～
父親	26	41	22	10
母親	6	25	30	37
合計	15	33	26	24

昭和51年度調査 (総数 1105)

	大正世代	昭和2～6	昭和6～9	昭和9～
父親	23	38	23	16
母親	4	19	29	45
合計	13	28	26	31

中学生の父母と高校生の父母とは当然のことながら年令層が異なる(必ずしも平均3歳若くなるとは限らないが)が、現在の時点において、ほぼ中学、高校生の父母の85%は昭和世代に属し、中学生の母親の55%は昭和9年以後の生まれ、即ち戦後派世代に属している。前年の報告でもふれたように昭和9年以後の生まれの方というのはほぼ全員が新制中学、したがって新学制のもとで新教育をうけ、戦後民主主義が成長期の培養土となっていた世代である。当然、大正世代から

昭和2～6年生れ以前（今でいえば46歳以上のオールドジェネレーション）の抱いている教育観とは別のものをもたれていてよいはずである。昭和6～9年生れの父母の％はほぼ26%（父親22～23%，母親29～30%）であり、現在の中学生が高校生になるころまでそれほどかわらないと推測されるので、この中間世代（旧新学制の谷間にあつて、小学校では戦前の教育が、しかし高学年より中学・高校で徹底的に民主主義に洗脳され、平和教育をまともにうけた転向の世代でもある）を緩衝地帯において、それ以前の生れに属する大正、昭和6年以前の世代と、昭和9年以後の生れの世代の教育観、教育要求を対比してゆくという方法を軸におきたいと思う。

仮説について補足する。大正世代、そして昭和6年生れまでの現在の中高生の父親の60%母親の30%を占める世代は中学下学年少くとも小学生時代までを昭和20年以前の戦時中におくり、「国家」のために教育をうけ、戦争中と戦後の耐乏時代の中で青春をおくったいわば犠牲世代であるが、にもかかわらず、大多数の人々は、自分たちの青年時代には苦しかったけれど何かがあったし、その「何か」は教育によって培われたと信じている。そしてこれに対比して今の子供たちは「恵まれているけれど何も、（理想、信念、なにかみ…）ないかわいそうな子ら」ではないかとかえりみる時が多い。公害に汚されない野山や小川が遊び場であり、理科で「物象」を学んだ経験をもち、高学歴者は哲学青年・文学青年になりかけた時期を多少なりとも持ったことであろう。そういえば、旧制中学、旧制高等女学校、小学校高等科、青年学校等の複線型教育体系の中でさまざまな学歴をもち、又意識させられてきた。しかし、さまざまな学歴形態があるということは、差の意識のしかたも多種多様であり、個々の場面では学歴差、上下差を意識することがあったとしても、それが能力差、階層という二種に分けた中の目分を意識しないで過すことができた世代である。ちなみに昭和25年大学進学者は18,000名、6.1%であった。

昭和9年生れ以後の世代は先述のように戦後世代に属し、六三制にくみこまれているが、昭和25年の高校進学率は42.5%（男子48.0 女子36.7%）26年では45.6%（男子51.4 女子39.6）27年には47%（男子52.9 女子42.1）と漸増する年輩である。この世代の意識決定要因というものは、民主主義教育とか、経済回復のムードとか、講和、安保、メーデー事件などという政治的要因などではなく、ほぼ半数が高校に進学でき、しかもその高校で、地域的に差はあるにしても、平等を指向する教育がうけられたということである。（進学率が70%をこえるようになると、高校はもはやそれだけで意識決定要因ではなくなり、高校間隔差

高校内部でのコース差が生じ平等意識は崩壊する）。

昭和世代の教育要求の具体的な表明については、本編、ないしは来年度に予定しているアンケート調査の結果によって分析を試みたいが、現在の中学生、高校生の親たちの年輩が、父親のほぼ60%が、昭和6年生れより年輩の世代に属し、母親のほぼ70～75%が昭和6年以後の生れの戦後派世代に入っているという比率は重視すべき事項であると考えられる。

3 家庭教育と学校教育について

父母の意識を問題にしようとする研究プロジェクトが第1に家庭教育と学校教育との関連ないし接点を取り上げたのは、父兄層を構成する年代が、特に家でのしつけ等に新しい見方をするようになってきたのではないかというわれわれの先入観もあるが、客観的条件としてこのごろ次の点で学校も好むと好まざるとにかかわらず、この接点ないし周辺の問題を意識せざるを得なくなっていることによる。

(1) 交通事故の激増・交通問題の深刻化の中で、通学途次の事故や放課後の安全管理の責任分野を明確にする必要を生じつつある。（これらは主として小学校であろうが、最近、オートバイ通学の是非や、それを許した場合の事故責任が学校か家庭かという面を含めて）

(2) 最近の身体的成長のアンバランスが目立つ中で（中高生の平均身長は20年前と比べて10.4 cmも高くなっているのに運動能力は減退している）心臓疾患、貧血、高血圧などによる課外活動時間中での事故責任の問題。

(3) 教師の労働時間をめぐるさまざまな状況、とくに給特法（昭46.5）施行後の校長の職務命令の適用、五日制の学校への適用が問題としてとり上げられる中で学校の部活動、教課外活動へのとりくみの後退。

(4) 社会教育、地域の文化体育活動のすすめ方の中で、中学校の部活動にPTA、地域有志による指導の試行があり、必修クラブを学校教育のワクに止める一方で部活動の社会教育への移行論もでてきた。

(5) 一般的学校不信、教師の能力、イデオロギー的偏向、女教師の比率の増加、塾の増加とそれへの期待、とどのつまり、学校へ子供をやると悪くなるということと、家庭で義務教育内容を教授するという特殊な例もでてくる。

(6) PTAの形骸化 一昔前までは財政の後援機関であったPTAが、公立学校の公費による施設設備の充実がほぼなされるようになると、本来の機能をも失い、形骸化し、結果として学校と家庭のつながりにスキを生じている。

(7) 家庭でのしつけの甘さ、過保護とともに一方で放

任、学校任せ、塾まかせの傾向の顕在化。

以上の要因は主として以前の学校教育の守備範囲を縮少の方向に持ってゆくものであるが、それが一方で教育過熱の現象を呈しているといわれる家庭の守備領域をひろげる結果になっているかという点必ずしもそうでもない。

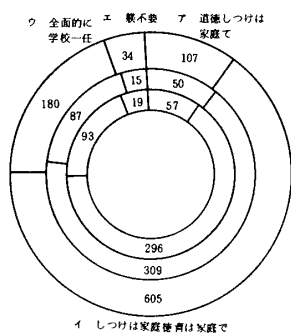
徳育、しつけと家庭教育とのかかわりについて、中学・高校の父兄にアンケートした結果は次の通りである。

◎徳育、しつけと家庭教育とのかかわりについて、どのようにお考えになりますか。

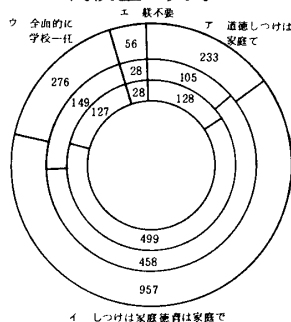
	大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親計	母親計	合計	合計%
ア. 道德、しつけは家庭で行なうべきである。	12 14	13 16	10 15	17 14	13	15	340	14
イ. しつけは家庭で行ない、知育徳育は学校が。	62 64	65 63	63 65	60 64	64	64	1562	64
ウ. 教育については全面的に学校に任せたい。	18 17	19 17	20 17	21 19	20	18	456	19
エ. 中学以上は家庭でも勉強が中心になる。	3 2	2 4	4 5	3 3	4	4	90	4

これを中学・高校別に、そして父母別にグラフで示すと次の如くである。

中学生の父母



高校生の父母



<家庭で>という回答が高校で16%、中学で11%であったほかには差は見当たらないし、この中、高の差は生徒の年齢に相応するものと理解してよいであろう。しかし中学生の母親とくに6年以後の戦後世代の中にしつけは家庭という意識がことのほか少なかったのは、今後のことを考えると、今一つ原因究明しなければならぬともいえる。

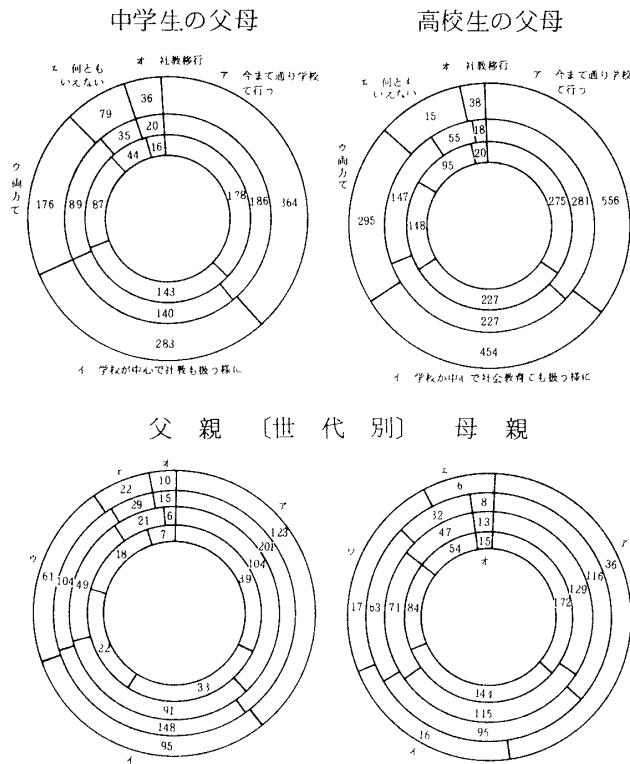
〔部活動と社会教育への移行〕
◎今まで部活動、校外活動もすべて学校教育の一環としてすすめられてきましたが、最近学校からきり離し、ゆくゆく社会教育に位置づけたいという論議があります。これについて、どう思われますか。

各回答の比は、中、高、父、母によってもほとんど変わらないが、これを世代別にみると次の如くであった。

人数の少ない父親の昭9以降、母親の大正世代だけが大きく変っているのは、やや決めてに欠けるが、今まで通り学校での部活動を大正世代は期待し<イ><ウ>に若い親たちが傾斜しているのは時代というべきか。

P T A活動についてもアンケートを求めたがここでは省略する。

	大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親計	母親計	合計	合計%
ア. 今まで通り学校で行なった方がよい。	39 47	40 37	38 34	32 37	39	37	920	38
イ. 学校が中心で、社会教育でも扱える様に。	30 21	30 30	33 31	27 31	30	30	737	30
ウ. 学校での分野と社会教育の分野の両方がある。	20 22	20 20	18 19	18 18	20	19	471	19
エ. 何ともいえない。	7 8	6 10	8 13	15 12	7	11	229	9
オ. 将来は社会教育にすべて移行した方がよい。	3	3 3	2 3	6 3	3	3	74	3



4 家庭でのしつけのあり方にみられる世代の差異

青少年の日常行動を評することはいろいろあるが礼儀を心得ていない、わかままである、がまんすることを知らない等々、年輩者から非難をこめて言われるものが、まず大半をしめているようである。そしてそれらのうちのほとんどが、戦後三十余年一貫して言われ続けてきたものであるとってさしつかえないのではあるまいか。戦争直後、既成の権威や価値体系が崩壊ないしは動揺した中で、戦後民主主義のいない手として期待される一方、アプレ世代とか、少し降っては太陽族などということばで非難されもした当時のティーンエイジャーたちが、一世代経た現在、同じ年頃の息子や娘を持っているはずである。戦争直後の困苦欠乏時代と異なり、豊かさ故のしつけ不足が云々されるこのごろであるが、しつけは何も親がすべてを行なうわけではない。学校、社会、そしてマスコミ、それらが一体となり、相乗作用して人間形成に影響していく。

① 食事のとき、子供が食べ残した場合にはどのようにされますか。

数字は合計数のみ実人数であとは% (以後同様)

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 決して残さないように。	17 8	19 10	26 13	25 15	21	13	185	17
イ. 腹をこわさない限りなるべく残さぬよう。	44 58	45 55	47 58	50 58	46	57	577	52
ウ. 別にとかめない。	30 29	30 26	22 22	23 24	27	24	282	25
エ. むしろひかえさせる。	9 4	6 9	5 6	2 1	6	4	53	5

ただその中であって、親の果たす役割は、日常生活の最も基本的な部分に関わるもので、一つ一つ些細なことがらの積み重ねが、無意識のうちに特有のパターンを作り出していくものである。そして何よりも重要なことは、それと意識して行なうしつけよりも、親の何気なく示す態度、特に意識しない日常行動が、子に及ぼす影響こそが最も大きなしつけとなるという事実である。また、生活様式の合理化や省力化にともない、昔からの強制的ないしは禁欲的な要素の強いしつけは少なくなった半面、科学的理論を持つ(らしい)合理的しつけがこれまたいささか情緒面をお留守にした形で行われていることもある。価値観が変化しつつあるとはいっても、古いものが消滅したわけではなく、それにとってかわる新しい価値観が確立したわけでもない。そして同一人の中にその両方が混在しているのが普通の姿であろうと思われる。世代間の差異がもしあるとするならば、それはそのような個人内の新旧の度合いの平均値の相違ということであろう。それにどういのか古い考え方で、どういのか新しいのか、個々の具体的な例についてみても、必ずしもあきらかではない。自分の流儀に合わないものを異世代の特定人の中に見出した場合、直ちにそれをもって相手の世代への非難の材料にしてしまうことはありがちなことである。そこで、日常生活の中でき普通に行われていることを通じてのこどもへの対処のしかたをみることにし、何らかの世代間の相違がみられるかどうかを探ってみようと考えた。質問事項はいずれも具体的なことに限定したが、これは抽象的なたずね方では、ことばのあらわす意味内容や、量的規準のたて方がまちまちで正確を期し難いからである。またこれらの事項はいずれも、筆者が直接または間接に話題にされるのを見聞したものばかりであることを申しそえておく。

まず最初に食事についてのしつけ方をとり上げてみた。食事上の習慣は家庭によりかなりまちまちなものであり、昔から嫁姑の摩擦の種にもなりがちなものであるが、現代のしつけと関連の深いことを二つ質問してみた。

② 食事をしながらテレビを見ることについて

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 決して見ない。	13 13	20 9	14 15	14 12	16	12	155	14
イ. 時と場合によって。	31 42	33 45	43 33	49 42	37	40	427	39
ウ. 見ながらの方が多い。	32 29	29 27	26 29	20 26	28	27	304	27
エ. いつも見て話題にしながら。	25 17	19 18	17 24	17 16	19	19	212	19

食事での食べ残しの扱いについても、食事時のテレビの扱いについても、いわゆる常識的な態度が最も多いとはいうものの、ものわりのよい態度が多いのはむしろ戦中派の方であり、新しい世代の方が厳しさの要素がやや多めに出ている。栄養のバランスの知識による合理性のあらわれでもあろうか。またテレビに対し

て寛大なのが、古い世代の特に父親に多いのは、昼間猛烈に働く戦中派や昭和一ケタ世代の、家庭での息抜きの傾向がでているものと思われる。

◎次に規律正しい生活の第一歩のように言われる起床時間、それも休日のものについてたずねてみた。

③ 休日でも平日と同じように早く起床させておられますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 家族そろって平日通り。	8 21	15 9	15 9	14 12	13	11	133	12
イ. 自分は遅いが子供はしつげ上、早く起こす。	3 0	3 1	4 0	2 2	3	1	24	2
ウ. 自分は平日通りだが子供は遅い。	42 33	36 32	34 24	35 24	37	29	361	33
エ. 家族全員遅く起床する。	47 46	46 58	47 55	49 62	47	58	587	53

平常通りの起床をするのはいずれも少数派で、これについては大正生れの年輩者世代が、父親と母親で正反対の傾向を示しているのは妙な感じである。50代女性の勤勉さが表われているともとれるが、そもそもこの年代の対象者が少数で、総員34名、女性の調査対象人員の6パーセント弱に過ぎないことも考慮する必要がある。戦後派の若い母親に、家中そろって遅く起

きる傾向が増加しているようである。大正生れの早起き傾向が本物であるとするならば、少なくとも母親においてはこの点に関してかなり相違があるとみなければならぬ。

◎ささいなことに価値観の相違があらわれる一例になるかと考えて、次に左ききの問題をとり上げてみた。

④ 幼いときに左ききの傾向をみとめた場合、どうされますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 無理してでも矯正する。	20 25	18 15	19 14	18 13	19	14	180	16
イ. 無理しない程度で矯正にとめる。	52 67	55 68	55 64	46 69	53	67	670	61
ウ. 自分で気がついて直すことに期待する程度。	16 8	18 12	10 11	17 9	16	10	141	13
エ. そのままにしておく。	8 0	8 2	15 9	18 9	11	6	92	8

父親母親共に、無理にならぬ程度での矯正への指向が強いものの、若干の男女差、および年代差がみられる。父親は矯正に努める者も、放置しておく者もその

比率が母親を上まわっている。また放置しておく傾向は、父母共に戦後派の方に増大が目立っている。小さなことながらこの問題は、少数者の指向を全体に合わせる

父母の教育要求についての世代論的分析

せるか、少数者の指向を尊重するか、といったかなり根本的な考え方にかかわりを持つ面があって、現に筆者も、ある年輩者が、左利きをなおそうとしない親の存在をその生活態度とからめて大いに憤慨しておられるのを聞いたことがある。父親は母親よりは積極的な意味で矯正または放置するものと思われる。また若い

世代の価値の多様化の傾向もこれにあらわれているとみてよからう。

◎交通道德についてのしつけ方はどうだろうか。弱者をいたわる心情とも関連させて、車内での座席ゆすりの問題に焦点をあててたずねてみた。

⑤ 車内でおとしよりに席をゆずるなどの交通道德はどのように身につけさせますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 幼いときから折にふれて教えるようにしている。	59 54	62 68	57 77	27 75	54	73	713	64
イ. 小学校で教えていただけることに期待。	7 13	11 3	9 5	10 4	10	4	75	7
ウ. 教える必要はなく、家ではいったことがない。	31 33	24 25	28 16	45 21	30	21	278	25
エ. むしろ子どもを先にすわらせる。	3 0	2 3	4 2	17 2	5	2	38	3

ここで目立つのは、世代別ともからめた、父親と母親の傾向の相違である。幼時からよく教えているとしているのは若い世代の母親に多いのに対し、教える必要なし、あるいはむしろ子供を先にすわせると答えたのは、戦後世代の若い父親にかなり多いのである。またこの世代の父親は、幼時から教えていると答えたのが異常な低率である。このようなしつけは教えなくてもおのずから身につくという考え方からくるものと

考えられる。あるいはしつけは母親まかせといった面もあるのかもしれない。いずれにせよ、社会とのかかわりの深いしつけ面での特徴があらわれているわけで、個人的あるいは家庭内のしつけの場合よりもマイホーム主義が色濃く出ているとみてよからう。

◎家庭内での手伝い、仕事分担についてはどんなふうであろうか。

⑥ 家庭では子供たちに仕事をさせることにしておられますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. はっきり責任分担を持たせてやらせる。	7 13	11 12	11 5	8 9	9	8	99	9
イ. 女の子には家事を手伝わせる。	26 33	34 20	29 32	29 34	30	31	335	30
ウ. 男女にかかわらず随時やらせる。	54 54	49 57	52 56	49 53	51	55	584	53
エ. なるべくさせないようにしている。	14 4	7 11	7 8	13 5	9	7	90	8

あまりはっきりした傾向は出ていないが、しいて探せば戦中派の後期ともいべき昭和2～6年生れの母親に、女の子には手伝わせるという傾向が他の世代に比べてやや少ないことであろうか。また、子供にはなるべく手伝わせないというのが、いずれも少数ながら大正生れの父親と純戦後派の父親にやや多目に出てい

る。オールド及び戦後のリベラリズムの影響とみるのうがち過ぎだろうか。

◎子の自発的自由行動をどの程度許容するかのパロメーターとして試みたのが次の質問である。

⑦ 休暇中に保護者なしで友人または兄弟だけでの宿泊旅行することを許可されますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. けっして許可しない。	23 13	19 20	28 25	18 22	22	22	243	22
イ. 危くなければ日数や同行者 などの条件次第で許可。	53 54	60 55	48 54	51 62	54	58	620	56
ウ. 男子の場合にかぎり許可。	8 4	4 4	6 6	2 4	5	5	55	5
エ. 個人の責任を意識させて許 可する。	17 38	18 20	17 15	29 14	19	16	196	18

条件次第で許可が過半数をしめるが、ここでも戦後派の若い父親に、比較的自由にやらせる傾向がでていように思われる。一方母親の方は、若い世代の方にむしろ不許可への傾向がみられはしまいか。父親でも戦後派と戦中派の分水嶺をなす昭和6～9年組は他に比べると不許可の比率が多いのである。推測に過ぎないが、若い世代の親のリベラルへの指向と、過保護的干渉への指向が混在してあらわれたものと受けとれないだろうか。前者は父親に、後者は母親により多くあらわれている。筆者は、昨年度中学一年生の担任をしていたが、夏期休暇中に二、三グループ数名の生徒(いずれも男子)が一泊ないし三、四泊の旅行(もちろん親の承諾を得た上で)をしたのには少々驚いたものである。こういうことについての、家庭での最終決定権はたぶん父親がにぎっていると思われるので、そこに

若い父親層の意識の変化を見る思いがしたのであった。なお、大正生れの母親に許可への指向が強くあらわれているが、この年代の母親は絶対数が少ないことも考慮に入れなければならない。それに今一つ、この年代の母親の子は、一応の年齢に達しているであろうことも関係していると思われる。

◎最後にしつけ面とは異なるが、子供とつながりの深い先生の服装についてどう考えているかを質問してみた。先生の服装は現実には一定の良識が守られているが、それでも十年二十年前に比べればかなり多様化してきているといえるであろう。それを親たちがどのようにみているか、年代差、男女差などからめて知りたかったのである。

⑧ 学校の先生の服装についてどう思いますか。

	大正生れ 父 母	昭和2～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計数	合計 %
ア. 季節を問わず背広ネクタイ を(女教師はそれに準じたもの のを)。	52 25	48 21	40 29	39 33	46	29	409	37
イ. ラフな労働に適した服装の ほうがよい。	19 29	17 39	21 27	17 33	18	32	283	26
ウ. 教師であろうと普通の人と 同じでどんな服装でもかまわ ない。	28 46	33 39	38 43	42 33	34	38	398	36

男女差と世代差がかなり明瞭にあらわれている。父親は背広ネクタイ型を望む比率が多いのに対し、母親は自由な服装への指向の方が大きい。そして世代差を加えてみると、父親の方は、あきらかに新世代ほど背広ネクタイ派が減少し、自由な服装支持が漸増している。一方母親の方は逆に背広ネクタイ指向が強まり、自由派が減少しているのである。戦後派男性のリベリズム指向はここにもはっきりあらわれているといつてよい。女性はむしろ旧世代の方にそれがみられるのはいったいどういうわけだろうか。服装統制の厳しか

った戦前戦中と敗戦前後の服装うんぬんどころではなかった物資欠乏混乱時代に少女期を過したことが、どこかに心情的影響を与えていそうな気がする。

次に上記の質問に対してア. およびイ. を選んだ人を対象に、先生の服装として望ましくないものを七種の中から任意に選んでもらったところ、次のような結果が得られた。各数字はパーセントであるが、どんな服装でもかまわないという答え(ウ.)を選んだ人数は分母に含まれていない。否定的な割合の多かったものからあげてみる。

父母の教育要求についての世代論的分析

	大正生れ		昭和2～6		昭和6～9		昭和9以後		父親計	母親計	合計
	父	母	父	母	父	母	父	母			
ラッパズボン	66	30	77	68	78	72	77	69	74	66	70
G パン	62	46	65	46	66	63	53	55	63	52	57
和服	47	46	38	58	59	74	57	68	47	65	57
ジャンパー	60	30	43	32	58	34	49	29	51	30	40
パンタロン	38	15	34	20	40	24	26	18	35	19	27
トレジャツ	36	15	26	22	26	24	28	18	29	20	24
スポーツシャツ	22	15	19	10	19	1	13	7	19	6	12

和服を除くと、これらはいずれも教育実習生の間にたまにまたはしばしば見られるものなのであるが、ほぼ予想通りの結果を得た。ラッパズボンはほぼどの世代にも評判が悪い（大正生れの母親は特にこの質問項目についてはわずか13名であるので、パーセンテージはあまり意味をなさない）のに対し、和服については年輩層が、パンタロンについては若い層が、やや寛大な傾向がみられる。スポーツシャツなどは若い層にはむしろ当りまえの服装ととられているようである。

総じてみると、日常生活上の具体的なしつけの面に世代差はたしかにあるとみてよいであろう。そしてそれが更に父親と母親の場合で異なったあらわれかたをしている場合が多いのである。一番目立ったことは、戦後派新世代の父親の示す一般的傾向である。食事やテレビなど家庭内の個人的分野に属するしつけはむしろ他の世代より厳しさを示す半面、車内での道徳、子供の旅行、左ききへの認識、教師の服装に対する認識など、社会的なかかわりの要素の多いことに対しては他世代よりもかなり自由主義的な発想が濃くあらわれていると思うのである。比較的ものわかりのよい多分にマイホーム主義的なパパといったイメージが浮かんでくる。女性には男性とは違った傾向もあって、戦後派世代でもかえって厳しい要求をもつ場合もある。同世代の父親が比較的あまく、子供の教育を母親まかせにする傾向と表裏の関係にあるとみられないだろう

か。いずれにせよ、この戦後派世代の親は高校生の母親で過半数をしめ、中学生の父親の約半数、母親の大部分をしめ、年一年そのシェアはふえて行く。価値観の変化は学校教育に対する考え方も変えて行くことであろう。そのような状況の中で、学校教育がどのような対応をすべきなのか、今後の重要な課題となることと思われる。

5 あと書き

予想外に若い父母層の意識は健全で、大正世代との質的差は見出されなかった。しかしこの調査を通じて感じたものは「たてまえ」としての対応のしかたには、父母、世代別何れにしても大差を見出すことはできず、「本音」にはかなり落差を見出すことができるのではないかとかがわれる面が多々あったことである。

今少し時間的余裕があったならば、その「ほんね」をアンケートし、何らかの目立つ傾向をつかみ得たのではないかと反省させられた次第である。

ただ教育をめぐる「ほんね」的要請はなかなかにはかり知れない事項に属する。できれば学校教育の今後の方向づけを得る資料として父母のありのままの意向をと意図したのであるが、これは今後の究明にまつことにしたい。

なおこの研究には、昭和51年度文部省科学研究費（奨励研究B）の交付をうけた、付記して謝意を表す。